

# 「国際的な連携及び交流活動」評価報告書

(平成14年度着手 全学テーマ別評価)

高 知 医 科 大 学

平成16年3月

大学評価・学位授与機構



# 大学評価・学位授与機構が行う大学評価

## 大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

### 1 評価の目的

大学評価・学位授与機構(以下「機構」)が行う評価は、大学及び大学共同利用機関(以下「大学等」)が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その結果を、大学等にフィードバックし、教育研究活動等の改善に役立てるとともに、社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の教育研究活動等について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

### 2 評価の区分

機構が行う評価は、今回報告する平成14年度着手分までを試行的実施期間としており、今回は以下の3区分で評価を実施した。

- (1) 全学テーマ別評価(国際的な連携及び交流活動)
- (2) 分野別教育評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)
- (3) 分野別研究評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)

### 3 目的及び目標に即した評価

機構が行う評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、教育研究活動等に関して大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、目的及び目標が、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、規模や資源などの人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的に整理されていることを前提とした。

## 全学テーマ別評価「国際的な連携及び交流活動」について

### 1 評価の対象機関及び内容

本テーマでは、大学等が行っている教育研究活動等を基盤とした国際的な連携や交流活動について、全学的(全機関的)な方針の下に部局等において行われている活動を対象とした。

対象機関は、設置者から要請のあった全国立大学(97大学)及び大学共同利用機関(総合地球環境学研究所を除く14機関)並びに公立大学の一部(4大学)とした。

評価は、大学等の現在の活動状況について、過去5年間の状況の分析を通じて、次の3つの評価項目により実施した。

- (1) 実施体制
- (2) 活動の内容及び方法
- (3) 活動の実績及び効果

### 2 評価のプロセス

- (1) 大学等においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書(根拠となる資料・データを含む。)を平成15年7月末に機構へ提出した。
- (2) 機構においては、専門委員会の下に、専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会に取りまとめ、大学評価委員会で評価結果を決定した。
- (3) 機構は、評価結果に対する対象大学等の意見の申立ての手続きを行った後、平成16年3月の大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

### 3 本報告書の内容

「対象機関の概要」、「目的」、「国際的な連携及び交流活動に関する目標」、「対象となる活動及び目標の分類整理表」及び「特記事項」は、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

「活動の分類ごとの評価結果」は、活動の分類ごとに、各評価項目での観点ごとの活動の状況・判断を記述している。「判断」は、目標を達成する上で、「優れている」、「相応である」、「問題がある」の3種類で示している。

「評価項目ごとの評価結果」は、評価項目ごとに、「目的及び目標の達成への貢献の状況」、「目的及び目標で意図した実績や効果の状況」として、活動の分類ごとの状況を総合的に判断して、当該評価項目全体の水準を以下の5種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

- ・十分に(貢献して又は挙がって)いる。
- ・おおむね(貢献して又は挙がって)いる。
- ・相応に(貢献して又は挙がって)いる。
- ・ある程度(貢献して又は挙がって)いる。
- ・ほとんど(貢献して又は挙がって)いない。

なお、これらの水準は、当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり、大学等間で相対比較することは意味を持たない。

また、評価項目ごとに、当該大学等の活動において特徴あるとみなされる点等を、「特に優れた点及び改善を要する点等」として記述している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について、その内容とそれへの対応を併せて示している。

### 4 本報告書の公表

本報告書は、大学等及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

## 対象機関の概要

大学等から提出された自己評価書から転載

- 1 機関名：高知医科大学
- 2 所在地：高知県南国市
- 3 学部・研究科・附置研究所等の構成  
(学部)医 (研究科)医博, 医修, 看修  
(関連施設)附属図書館, アドミッションセンター, 保健管理センター, 附属病院, 動物実験施設, 実験実習機器センター, 医学情報センター, RIセンター
- 4 学生総数及び教職員総数  
(学生総数): 学部 836 人, 大学院 111 人  
(教員総数): 284 人  
(教員以外の職員総数): 611 人
- 5 特徴  
高知県は少子・高齢化が進み, 人口過疎県であった。成人病死亡率, 周産期死亡率, 感染性・遺伝性疾患の各発生率が極めて高いという医療問題や, 山間部, 僻地, 離島などでの医師不足, ならびに無医地区の存在という深刻な社会問題の解消の期待を受けて, 本学は, 昭和 51 年 10 月に, 「人間味豊かな良き医師づくり」, 「地域医療に密着した学風づくり」を基本理念として創設された。本学の国際連携活動は創設時の英語教育に始まる。基礎系, 臨床系教員の当番制による医学英語の実施である。そして 2 代目学長は率先してヨーロッパをはじめとする諸外国との学术交流を推進した。昭和 60 年 10 月には中国・佳木斯医学院と交流協定を結び, 留学生の受け入れ等による人材育成支援や相互交流を深めてきた。平成 4 年 3 月にはカナダ・プリティッシュコロンビア大学医学部と総合学术交流協定を結び, 教授層から大学院生, 学部学生まで, 相互交流を重ね, 研究・教育の国際化を深めてきた。さらに平成 15 年 6 月に韓国・漢陽大学看護学部と総合交流協定を締結した。またここ 10 数年来, 南米, パキスタン, チベット, 韓国, インドネシア等で教員・学生一体となった医学学術調査や住民への医療支援活動を行い, 高齢者を中心とした現地住民の健康調査, 検診 補助医療者の養成等による連携活動を行ってきた。これらのことを含め本学は開発途上国等の医学・医療の指導者となるべき人材の育成を支援し, 医学・医療の研究・技術・教育の向上・発展, 普及のために関係機関と連携し, 国際友好親善を深めてきた。また, 国際会議等の実施・参加, 世界の各機関との共同研究等の実施を通して研究連携・交流と若手研究者の育成を図っている。

## 目的

大学等から提出された自己評価書から転載

1. 開発途上国等との間において医学・看護学・医療(以下「医学等」とする)関係の共同研究, 教職員の受け入れ, あるいは各種事業への参加・支援活動を行い, 対象国の医学等の研究・技術の向上・発展, ならびに医療活動の普及・復興に貢献し, 親善友好を深める。
2. 開発途上国等からの留学生を受け入れ, 出身国の医学・看護学研究, 医療活動の指導者となる人材を育成し, 各国の医学・医療の向上, 発展, 普及に貢献する。
3. 本学と歴史的経緯・人的交流のあった大学と交流協定を締結し, 総合的教育学术交流を実施し, 大学相互の連携を密にし, 研究・教育の向上・発展, 親善・友好を図り, 国際的視野・能力を持った医学・看護学研究者, 医療従事者(以下「医学研究者等」とする)を育成する。
4. 世界各国からの外国人教員, 研究者, 研究員等を受け入れ, また教員, 研究者, 研究員を諸外国に派遣し, 学内の研究・教育の国際化を図り, 国際的視野・能力を持った医学研究者等を育成し, 世界各国の医療関係者と交流を深める。
5. 国際研究集会や国際会議, シンポジウム, セミナー, ワークショップ等を開催し, また参加し, 先進的医学・看護学研究・医療技術の成果を取り入れ, かつ本学の研究成果を国際社会に発信する。さらに本学若手研究者を育成しつつ, 世界各国の研究者との交流を深める。
6. 世界各地の先進的医学・看護学研究・医療実施機関との各種共同研究の実施, 参画ならびに研究者の派遣を行い, 最先端の医学研究・医療を実践し, 若手研究者の育成ならびに世界各国の研究機関, 研究者との交流を深める。
7. 受け入れた外国人研究者・留学生, 派遣する研究者・留学生に対する語学教育支援, 精神的支援, 経済的支援, ならびにそれらを実施するための組織等基盤整備を行う。

## 国際的な連携及び交流活動に関する目標

大学等から提出された自己評価書から転載

目的 1, 2 を達成するために 1~5 の目標を設定する。

1. 開発途上国等の研究者・医療従事者の受け入れ，共同研究を実施し，出身国の医学研究・医療技術の向上・発展，普及に貢献し，学术交流を推進する。
2. 開発途上国等から留学生を受け入れ，医学・看護学・医療関係の研究指導，教育を実施し，出身国の医学・医療活動の指導的立場に立つ人材を育成する。
3. 開発途上国等に対して国際機関，国，地方公共団体等の各種団体が実施する各種医療関係事業に参加し，開発途上国等の医学等の向上・発展，普及，復興，に貢献する。
4. 開発途上国等に本学教職員，学生を独自に派遣し，健康診断・調査あるいは診療活動による医療の向上に貢献し，同時に当該国と日本の加齢による身体・精神機能の変化の国際比較の調査・研究を進展させる。
5. 開発途上国等に対し本学学生が実施する国際協力活動への参加を支援し，豊かな国際的経験や視野を持った学生，医療従事者を育成する。

目的 3 を達成するために目標 6~8 を設定する。

6. カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）との総合交流のためパールプロジェクト・PEARL（Pacific Education And Research Liaison）Project（教授・学生・院生の交換，留学による単位の互換，短期留学，教育システムの共有化等）を推進し，両大学の研究・教育の向上・発展ならびに親善を図り，国際的視野・能力を持った医学・看護学研究者，医療従事者を育成する。  
また韓国漢陽大学看護学部との総合交流協定に基づき看護研究，教育ならびに人的交流を深める。
7. 中国黒龍江省佳木斯（チャムス）大学（旧佳木斯医学院）と学術，教育，学生交流（よさこいプロジェクト・短期留学生の受け入れ）等を推進し，両大学の研究・教育の向上・発展ならびに親善を図り，国際的視野・能力を持った医学研究者等を育成する。
8. 体験短期留学制度（ジョン万プロジェクト）により UBC ならびにオーストラリア・クィーンズランド大学（QL）への短期留学（語学研修・授業体験）を実施して両大学間との親善を図り，国際的視野・能力を持った医療従事者を育成する。

目的 4 を達成するために目標 9~11 を設定する。

9. 世界各国からの外国人教員，研究者，研究員の受け入れ，任用を行い，学内の研究，教育の国際化を図り，国際的視野・能力を持つ医学研究者等を育成する。
10. 世界各地の医学等関係の研究・教育機関へ教員，研究者，研究員を派遣し，研究，教育の国際化を図り国際的視野・能力のある医学研究者等を育成する。
11. 海外の医学・医療関係の大学・機関等と講演，視察などの教育交流活動を実施し，国際的視野を備えた医療従事者を育成する。

目的 5 を達成するために目標 12~13 を設定する。

12. 医学等関係の各種国際研究集会や国際会議等に参加し，先進的研究・技術成果の取得，研究成果の国際社会への発信，本学若手研究者の育成，ならびに世界各国の研究者との交流を深める。
13. 本学の先進的医学・看護学研究分野に関する国際研究集会，国際会議等を開催し，研究成果の発信，日・米・欧を結ぶ研究ネットワークの構築，ならびに世界各国の研究者との交流を行う。

目的 6 を達成するために目標 14~15 を設定する。

14. 世界各地の先進的医学研究・医療機関と各種共同研究を行い，最先端の研究や技術の実施と普及を図り，世界各国の研究者との交流を深める。
15. 世界各地の先進的医学研究・医療実施機関へ若手研究者を派遣し，最先端の医学研究，医療技術を学ばせ若手研究者の育成ならびに世界各国の研究者との交流を深める。

目的 7 を達成するために目標 16~19 を設定する。

16. 外国人留学生に対し，日本語習得の支援，経済的支援あるいは悩み事相談等の各種支援を実施し留学生生活を支える。また帰国した留学生，研究者のネットワークを構築し，日本と出身国の架け橋となる医療従事者を育成する。
17. ネイティブスピーカー教員による，英語，中国語，スペイン語教育を充実し，国際的視野をもち，世界を舞台に医療活動ができる人材を育成する。
18. 本学独自の国際交流プロジェクトの推進・発展のため，学内醸金による財源確保システムを構築する。
19. 国際交流基金を整備拡充し，学生，教官，外国人研究者等の国際交流活動の充実と発展を支援する。

## 対象となる活動及び目標の分類整理表

大学等から提出された自己評価書から転載

活動の分類	「活動の分類」の概要	対象となる活動	対応する目標の番号
教職員等の受入れ・派遣	<p>本学と交流協定を締結した大学をはじめとする医学・看護学・医療分野の外国人研究者等の受入れ，外国人教員等の任用による研究者育成，研究交流，人的交流の活動。</p> <p>本学の若手を中心とした研究者等の海外の医学・看護学・医療関係機関への派遣による，若手研究者の研鑽，育成，国際的規模の研究者交流の活動。</p>	(1)外国人研究者の受入れ	1.6.7.9
		(2)外国人教員，客員研究員等の任用	1.9
		(3)外国人研究者等に対する各種支援	18.19
		(4)教職員の派遣	6.7.10.11
		(5)その他，「教職員等の受入れ・派遣」に属する個別活動	(18.19)
教育・学生交流	<p>開発途上国からの医学・看護学・医療分野の留学生の受入れによる出身国の指導的立場に立つ人材の育成，ならびに医学・医療の向上発展への支援活動。</p> <p>本学と交流協定を締結した大学との留学生の交換を中心とした総合的な教育交流活動。</p> <p>教育交流を目的とした本学教員の海外派遣，学生の海外留学によって，国際的な教員，学生間の交流を促進し，国際的視野・活動能力を持つ人材育成のための活動。</p>	(6)海外の大学・機関等との教育交流活動	6.7.8.11
		(7)外国人留学生の受入れ	2.6.7.8
		(8)外国人留学生に対する各種支援	16.
		(9)地域との連携を意図した外国人留学生交流支援	6.7.8
		(10)学生の海外留学	6.7.8
		(11)外国人留学生の交流ネットワークの構築	16
		(12)その他「教育・学生交流」に属する個別活動	17.18
		国際会議等の開催・参加	<p>医学・看護学・医療分野の国際会議等の開催・参加を通して，研究成果の獲得・発表等を行い，国際的研究活動面の発展に寄与するとともに，研究者間の交流・連携を図りつつ本学若手研究者を育成する活動。</p>
(14)国際交流協定による国際会議，シンポジウム	6.7		
(15)国際学術組織との交流によるセミナー，ワークショップ	12.13		
(16)その他，「国際会議等の開催・参加」に属する個別活動			
国際共同研究の実施・参画	<p>外国政府や関係諸機関等と連携して医学・看護学・医療分野における諸課題を共同研究し，日米欧の研究ネットワークの構築をはじめとする関係国，機関との研究連携，交流を深め，先端医学・看護学・医療技術の構築，実現を目指す活動。</p>	(17)国際共同研究事業	
		(18)政府間協定に基づく国際共同研究	14.15
		(19)科学研究費補助金による国際共同研究	14.15
		(20)国際交流協定による国際共同研究	6.7.14.15
		(21)その他，「国際共同研究の実施・参画」に属する個別活動	14.15
開発途上国等への国際協力	<p>開発途上国等に対し諸機関が実施する医学・看護学・医療分野の協力支援事業に参加し，各国の医療の向上・発展・普及に貢献する活動。</p> <p>開発途上国等に対し本学スタッフ・学生による診療活動，健康指導，健康・疾病調査，教育等を実施し，当該国の医療の向上・普及・発展に貢献する活動。</p>	(22)国，地方自治体等が行う技術協力事業への参加	3
		(23)大学等独自の開発途上国等への国際教育協力	4.5
		(24)国際機関等との事業への参加及び共同実施	3
		(25)学生の国際協力活動参加への支援	4.5
		(26)その他，「開発途上国等への国際協力」に属する個別活動	

## 活動の分類ごとの評価結果

### 1 教職員等の受入れ・派遣

#### 実施体制

実施体制の整備・機能 教職員等の受入れ・派遣の活動は、国際交流委員会の下、各部局の国際交流担当委員会及び担当係が中心となり、実行している。その事務的な管理・支援は、総務部企画広報室が担当している。国際交流委員会は学長の指揮の下、教育研究副学長を委員長として、医療担当副学長、附属図書館長、医学科及び看護学科から選出された教授4名と事務局から総務部長と教務部長の9名で構成されている。教職員の受入れ・派遣を促進するために海外大学との国際学術交流協定を締結している。カナダ・プリティッシュ・コロンビア大学（UBC）との交流実施組織として Pearl プロジェクト小委員会、中国佳木斯大学との交流実施組織として、よさこいプロジェクト小委員会を設置している。Pearl プロジェクト小委員会及びよさこいプロジェクト小委員会は学長、副学長と5つの資金提供教室と協力参加教室の任意参加により構成され、各部局の規模と実状に応じて、外国人教員の任用、研究者、教職員の派遣・受入れ及びその他の活動支援、諸活動の問題解決を図っている。外国人研究者の宿泊施設は、副学長を管理責任者とする国際交流会館が整備され、その事務処理は、学生課が担当する。高知医科大学保健管理センター外国人留学生相談室を設置して、国際交流会館での外国人教員・研究者への各種生活相談に応じている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。活動目標の周知・公表 学内関係者の各種活動の目標・趣旨・手順などは、国際交流委員会、教授会を通して各担当者に対して周知している。また、Pearl プロジェクト、よさこいプロジェクトの活動については、それぞれの小委員会、教授会からの報告や高知医科大学学報（年3回発行）を通して各担当者に周知・公表が図られている。活動の受け手や学外者への周知・公表は、高知大学学報で、また Pearl プロジェクトとよさこいプロジェクトは、まとめて龍馬オーシャンプロジェクトとして毎年発行される高知医科大学案内で行っている。外務省と共催で「外交の窓 in 高知」を開催するなどの活動状況の広報も行っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。改善システムの整備・機能 活動状況の問題点を点検するために、特別な調査やヒアリングなどは行っていないが、Pearl プロジェクト、よさこいプロジェクト小委員会及び個別の教室で、各活動の後に反省会を開き、問題の把握に努めている。さらに、保健管理センターの外国人留学生相談員（当該大学外国人女性スタッフ）が国際交流会館で生活している研究員の相談にあたり、保健管

理センター運営委員会へ問題などを報告し、必要に応じて国際交流委員会に諮り、改善を行っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

#### 活動の内容及び方法

活動計画・内容 外国人研究者の受入れについては、国際交流委員会と各プロジェクト小委員会で、それぞれの運営申し合わせに従って活動計画を策定している。また、開発途上国から毎年10名程度の受入れを行い、派遣については先進国等へ助手をはじめ教員を毎年100名程度派遣しているが、大部分の受入れ・派遣活動に関しては各教室の独自の活動計画に依存している。外国人教員と研究者の任用については、各教室の必要に応じて計画し、教授会で審議している。外国人研究者への活動支援策として、各教室からの申請に基づき国際交流委員会が国際交流会館への入居利用計画を策定している。経済的支援としては、Pearl プロジェクトにおいては、各教室からの拠出金を研究者の受入れ・派遣に充て、よさこいプロジェクトにおいては国際交流基金からの援助と各教室独自の資金を準備している。また、国際交流会館へ専門の職員を定期的に派遣して、入居者の日本語教育及び諸種相談事に助言活動を行っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。活動の方法 国際交流委員会の下、各教室の委任経理金及び前述プロジェクトへの拠出金、独自に設立した国際交流基金、さらに中国政府の派遣研究員制度、松前国際友好財団などから得た基金、科学振興財団、日本学術振興会、学長裁量経費を活用して、開発途上国及び先進国へ教職員の派遣や受入れを行っている。Pearl プロジェクト及びよさこいプロジェクトとして、国際学術交流協定締結大学との交流を積極的に行い、国際的な人的交流を促進している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

#### 活動の実績及び効果

活動の実績 外国人研究者の受入れ実績は、毎年5～18名の間で増減し5年間で65名である。受入れ国は17ヶ国に及び、中国からが22名と最も多い。教職員の海外派遣の実績は平成10年～14年度の5年間に、196名、194名、199名、188名、181名と推移し、合計で958名である。中でも若手助手の派遣が3分の1以上を占め、派遣先の国としては米国、英国が大半を占める。外国人教員等の任用は、平成10年度～14年度までに7～9名で一定した推移であり、合計46名のうち助手の占める割合が30名と最も多い。各活動に投入した資金等の資源に対しての実績は高い効率性を有している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

活動の効果 外国人研究者の受入れにより、受け入れた研究者が帰国後受入れ教室の教授を研究会や講演会に招へいする例があり、国際交流の促進に貢献している。また、若手研究者を過去 5 年間で、117 名、世界 20 ヶ国に派遣したことにより、先端医療技術、先端研究技術の習得に役立っている。開発途上国から過去 5 年間に 65 名の研究者を受け入れ指導していることや、34 ヶ国に 316 名の研究者を派遣し国際交流に参加したことが、高知県地域の医療活動及び医学研究活動への発展に還元されている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

## 2 教育・学生交流

### 実施体制

実施体制の整備・機能 外国人留学生の派遣と受入れ、教育及び各種支援活動は、国際交流事業の基本方針の下に国際交流委員会と各種小委員会が設けられ、国際交流協定の締結及び国際交流会館の運営を行っている。その事務的な管理・支援は、学生課が担当している。外国人留学生の宿泊施設として国際交流会館が整備されている。保健管理センターに外国人留学生相談室を設置して、国際交流会館での各種生活相談に応じている。各教室単位での外国大学との交流も行われている。受入れ外国人留学生に対する支援は、2 名の留学生カウンセラー、地域の支援ネットワークとして当該大学所在地南国市を中心とした各種団体、ボランティアグループにより行われている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

活動目標の周知・公表 外国人留学生の教育と交流活動の目標・趣旨・手順などの周知は、国際交流委員会、教授会を通して各担当者に対して行われている。また、Pearl プロジェクト、よさこいプロジェクトの活動については、それぞれの小委員会、教授会からの報告や高知医科大学学報（年 3 回）を通して各担当者に周知・公表が図られている。活動の受け手や学外への活動目標の周知・公表は、Pearl プロジェクト、よさこいプロジェクトをまとめて龍馬オーシャンプロジェクトとして毎年発行される高知医科大学案内により行われている。また、当該大学学生とその保護者を対象とした広報誌「おこうだより」においても留学生や海外派遣学生の留学体験などの活動を掲載し、周知・公表を行っている。学生課留学生担当は、高知大・高知医科大留学生を支援する会と情報交換を行っている。同会は活動報告等の記載した会誌を、学内及び会員に配布している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

改善システムの整備・機能 活動状況の問題点を点検するために、特別な調査やヒアリングなどは行っていないが、Pearl プロジェクト、よさこいプロジェクト小委員会及び個別の教室で、各活動の後に反省会を開き問題の

把握に努めている。さらに、保健管理センターの外国人留学生相談員が国際交流会館で生活している留学生の相談にあたり、保健管理センター運営委員会へ問題などを報告し、必要に応じて国際交流委員会に諮り改善を行っている。平成 13 年度より、教育研究基盤校費を傾斜配分とし、国際貢献と外部資金獲得の実績を反映させることにより、活動の活性化と活動実績の評価を行っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

### 活動の内容及び方法

活動計画・内容 海外大学・研究機関との教育交流活動の中心は学術交流協定を締結しているカナダの UBC 大学、佳木斯大学、クイーンズランド大学 (QL)、漢陽大学の 4 大学との交流活動を総合した龍馬オーシャンプロジェクトであり、国際交流委員会の下に計画・立案し留学生の受入れと派遣を実施している。各教室単位での教育交流活動は、各教室単位で計画・実行されている。開発途上国から博士課程の学生を受け入れ、研究者として自立するための教育を行っている。留学生への支援として、留学生相談室、国際交流会館の設置のほか、各種奨学金の給付、日本語教育の補講、学生課による旅行などの学内企画、学外国際交流団体等と連携した活動を計画・実行している。当該大学学生の海外派遣に備え、英語以外にもネイティブスタッフによる語学教育を行っている。看護学科では平成 15 年に韓国漢陽大学校と交流協定を締結し、5 月と 6 月にそれぞれ 20 名近い施設研修生の受け入れを行っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

活動の方法 龍馬オーシャンプロジェクトによる留学生受入れでは、単位互換制度、模擬チュートリアル教育などを実施している。留学生の派遣は夏休み期間を利用した短期留学制度を採用し、多数の学生の参画を可能としている。また留学生の受入れに関して、各教室独自で大学院生などを個別に受け入れている。企業から毎年 200 万円の寄付を得て、10 名の学生を短期留学生として派遣している。私費留学生に対しては、各種財団等からの資金に積極的に学生を推薦し、過去 5 年間で 20 名が 4 つの財団から奨学金を受給した。また、当該大学国際交流基金や各受入れ教室からの拠出金も利用している。これらの諸活動の実施には電子メールやホームページの活用などを行い活動方法の効率化を図っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

### 活動の実績及び効果

活動の実績 当該大学が交流協定を締結している 4 大学との単位互換制度を利用して、過去 5 年間で 7 名を 5 教室に受入れた。龍馬オーシャンプロジェクトによる留学生の受入れは、平成 10、11 年度は各 1 名であったが、12 年度 7 名、13 年度 4 名、14 年度 8 名と増加傾向である。また、同プロジェクトによる学生の派遣は、平成 10



年度 4 名, 11 年度 9 名, 12 年度 13 名, 13 年度と 14 年度には各 11 名である。各教室独自の留学生の受入れは, 5 年間で 12 ヶ国 131 名であり, 年次変化は 21 ~ 30 名の範囲である。国際交流会館の利用は平成 11 ~ 14 年度の 5 年間に 106 名であり, 留学生相談室への相談件数は, 平成 11 ~ 14 年度の過去 5 年間に 359 件あった。開発途上国からの留学生が博士号を取得し, 出身国の医学・医療活動の重要な担い手になっており, 龍馬オーシャンプロジェクトに対する学生の満足度も高く, 投入諸資源は効率的に使われている。

以上から, この観点の状況は目標に照らして優れている。活動の効果 短期学生派遣の選抜に, TOEFL の成績と面接を勧奨しているため, 学生に英語への関心を持たせる効果があった。龍馬オーシャンプロジェクトによる学生派遣については, 学生の感想からは満足度の高さがうかがえる。留学生の受入れについては, 大部分が開発途上国からであり, 開発途上国の医学の向上, 発展に貢献している。留学の感想などによると学生の満足度は高い。以上から, この観点の状況は目標に照らして相応である。

### 3 国際会議等の開催・参加

#### 実施体制

実施体制の整備・機能 国際交流協定による国際会議の開催・参加活動は, 国際交流委員会が基本方針を策定の上, Pearl プロジェクト小委員会が活動の中心となり, 実行されている。その事務的な管理・支援は, 総務部企画広報室が担当している。上記以外の国際研究集会, 国際学術組織との交流によるセミナー, ワークショップ活動は各教室が主体となり実施している。

以上から, この観点の状況は目標に照らして相応である。活動目標の周知・公表 学内関係者への国際交流協定による各種活動の目標・趣旨・手順などの周知は, 国際交流委員会, 教授会を通して各担当者に行き渡るように配慮されている。また, Pearl プロジェクトの活動については, 小委員会, 教授会からの報告により活動担当者へ周知されている。活動の受け手や学外関係者については, 高知医科大学学報により公表されている。各教室単位の国際研究集会, 国際学術組織との交流によるセミナー, ワークショップ活動等は, 学内外の関係者へポスター掲示, 会議・集会の冊子等を配布・回覧することにより周知・公表している。また, 各教室(平成 13 年度は 13 教室)では毎年教室誌を作成して学内外の関係者に配布し, 活動の目標, 内容を周知している。

以上から, この観点の状況は目標に照らして相応である。改善システムの整備・機能 国際交流協定に関する活動の状況や問題点を把握するために, Pearl シンポジウム・国際会議については毎年活動終了後に, 小委員会で活動内容の課題・問題点などが検討されているが, 調査・ヒアリングなどは実施していない。各教室主体の国際研

究集会や国際学術組織との交流によるセミナー, ワークショップ活動については, 活動終了後に, 各教室会議等で報告・反省会が実施され, 改善を図っている。

以上から, この観点の状況は目標に照らして相応である。

#### 活動の内容及び方法

活動計画・内容 国際交流協定による国際会議の開催・参加については, Pearl プロジェクトの交流協定書, 覚書や申し合わせ事項にしたがって, プロジェクト小委員会の下に相手側と受入れ教室の希望を調整しながら立案・実行されている。各教室で個別に行う国際研究集会については, 教授を中心として若手研究者を参加させ研究能力の向上を図るよう計画・実行している。

以上から, この観点の状況は目標に照らして優れている。活動の方法 国際交流協定によるシンポジウム開催は, 副学長を中心に, Pearl プロジェクト小委員会の下各教室と連携しながら, UBC 大学との間で調整等を行っている。また, 開催地を毎回交換し, 両大学から多数の研究者が参加できるように工夫している。資金としては, 両大学の拠出金や各教室からの拠出金を充てている。各教室が独自に最も効果的と考えられる方法で, シンポジウム開催, 国際研究集会, セミナー等への参加などの活動を行っている。各教室では, 文部科学・厚生労働省の科学研究費補助金, 在外研究員派遣制度, 民間財団等の資金等の獲得を行っている。国際会議開催の立案や相手側との折衝, 研究内容の確認などの迅速な対応には, 電子メールを有効利用することにより効率化を図っている。

以上から, この観点の状況は目標に照らして相応である。

#### 活動の実績及び効果

活動の実績 国際交流協定に基づく国際シンポジウムの開催は, 平成 10 年以後の 5 年間で 3 回行われた。国際研究集会での発表・参加は平成 10 年以後の 5 年間に 69 名 ~ 94 名で推移しており, 本活動による海外渡航の合計は 626 名に上る。また, 国際シンポジウムへの出席件数は, 同期間に毎年 7 ~ 24 件で推移している。資金と環境資源の投入に対する効率性の判断は, 開催結果からの判断及び各教室へのアンケートによると投入資源に見合ったものである。

以上から, この観点の状況は目標に照らして相応である。活動の効果 第 3 回 Pearl シンポジウムとして開催した医学教育シンポジウムでは, UBC 大学の教授と留学生によるチュートリアル教育として公開授業が行われ, 当該大学及び相手側にも多大なインパクトと満足を与えた。老年病学教室主催の国際シンポジウム開催により, 欧米への大学へ講演依頼につながった。さらに各教室では, 毎年 100 名以上の若手研究者を国際学術集会に参加・発表させることにより最先端の医療・看護学における情報を得る機会を与えており, 満足度の高さはアンケート調査にて示されている。国際交流基金, 学長裁量経費, 科

学研究費補助金、委任経理金などを有効利用し、平成10年度から5年の間に610件の国際研究集会への参加・発表があり、世界各国との研究交流と人的交流を目的とした本活動に十分に貢献している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

#### 4 国際共同研究の実施・参画

##### 実施体制

実施体制の整備・機能 国際交流協定に基づく国際共同研究の実施・参画活動は、国際交流委員会の基本方針の下にプロジェクト小委員会が中心となり、実行されている。その事務的な管理・支援は、主に総務部企画広報室が担当している。政府間協定及び科学研究費補助金等による国際共同研究などの、教室で行われる個別活動は、各教室の長を中心として円滑に調整・運営されている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

活動目標の周知・公表 国際交流協定に基づく国際共同研究の実施・参画活動の目標・趣旨・手順などの周知は、国際交流委員会、教授会の審議・決定を経て、教授を通して各担当者に周知されている。また、活動の受け手に対しては、交流協定書により周知が図られている。政府間協定や科学研究費補助金による国際共同研究の目標・趣旨は、事務局より連絡文書等で活動担当者へ周知している。教室単位の活動では書簡や電子メールなどで相手側担当者との間での内容確認を行っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

改善システムの整備・機能 国際交流協定に基づく国際共同研究活動の問題点を点検するための特別な調査・ヒアリングなどは行われていないが、Pearl プロジェクトとよさこいプロジェクト小委員会及び個別の教室で、各活動の終了後に反省会を開き、問題の把握を行っている。政府間協定や科学研究費補助金による国際共同研究については、それぞれの報告書などで研究代表者が中心となり問題点を改善している。また、各教室での個別活動については、必要に応じて教室会議で問題点を把握・改善を図っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

##### 活動の内容及び方法

活動計画・内容 国際交流協定による本活動には、相手側の希望を勘案しながら関連プロジェクト小委員会での計画立案・実行している。また、政府間協定や科学研究費補助金による国際共同研究は、教室の担当者が相手側と交渉の上、計画・実施し、その事務的支援は、主として総務部企画広報室が担当している。国際交流協定に基づく国際共同研究として心臓血管疾患、脳神経疾患及び医療システム改善に関する共同研究を行っている。政府間協定による国際共同研究としては、地域在宅高齢者の包

括的機能に関する日米比較研究、また科学研究費補助金などによる個別の国際共同研究としてリュウシュマニア症、ニューギニアでの神経難病に関する疫学調査研究等を行っている。個別の教室による国際共同研究は、それぞれの分野で発展性がある種々の活動を行っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

活動の方法 国際交流協定に基づく国際共同研究は、各小委員会で各種の調整を行っている。また、各教室における個別活動では、国際交流基金、学長裁量経費、文部科学省・日本学術振興会、厚生労働省からの補助金、科学技術振興事業団、民間財団からの資金を得て行われている。国際共同研究の立案、事前折衝、研究内容・手法、問題点などに関してファクシミリ、電子メールによる情報交換が行われ、作業の効率化に取り組んでいる。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

##### 活動の実績及び効果

活動の実績 国際交流協定による国際共同研究としては、平成10年からの5年間に合計13件実施された。科学研究費補助金などによる研究はアジアを中心として合計9件21ヶ国の研究者との間で実施されている。各教室による個別の共同研究は、過去5年間で計71件実施された。延べ件数による年次変化は、国際交流協定によるものが、8件から10件に増加しており、科学研究費補助金によるものは、毎年3~5件、各教室による個別研究は29~37件で推移している。投入諸資源に対する効率性は、参加研究者が多くの実績を挙げており、高いと判断できる。国際共同研究の相手国として、米国をはじめ先進国が主であり、研究領域としても分子・生体制御学領域から社会医学、医療情報学にいたる幅広い分野に渡り、発展性がある。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

活動の効果 国際交流協定に基づく国際共同研究による結果として、当該大学の実施担当者から高度な共同研究ができたとのコメントが寄せられ、また実施後の相手側からの連絡により論文発表などについて満足の意が伝えられている。また、各教室による個別の活動では毎年100名にのぼる若手研究者を国際研究集会に派遣した結果、国際共同研究が生まれるという好循環を生じている。国際共同研究が社会のニーズに応えている例としては、国際交流協定に基づく国際共同研究として行った、カナダ国の大学医学部との心、脳疾患に関する研究は、高知新聞でも取り上げられ、環太平洋の連携強化につながる活動として報道されている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

#### 5 開発途上国等への国際協力

##### 実施体制

実施体制の整備・機能 開発途上国への国際交流協力活動には、国際交流委員会の基本方針の下に、主として、よさこいプロジェクト小委員会、当該大学教員及び学生で組織する「フィールド医学研究会」や「アジア僻地医療を支援する会」により実施されている。その事務的な管理・支援は、主として学生課が担当している。「フィールド医学研究会」と「アジア僻地医療を支援する会」は関連教室の教員若干名、附属病院看護部及び学生自治会のクラブ員から構成され、顧問教室教員を中心として役割分担を定め、相互の連絡の下に、情報収集と活動計画の策定を行っている。科学研究費補助金、国際協力機構（JICA）、地方自治体援助の途上国への活動は、各教室が中心となり、状況に応じて学内各部署や他大学からの参加を得ながら、活動を実施している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。活動目標の周知・公表 開発途上国への国際交流及び協力活動の目標・趣旨・手順などの周知は、国際交流委員会、教授会を通して各担当者に周知されている。また、「フィールド医学研究会」と「アジア僻地医療を支援する会」は相手側担当者と綿密な連絡・調整の上、担当教員、学生自治会クラブを通して、直接活動担当者に周知・公表が図られている。受け手や学外への周知・公表については、高知医科大学報、当該大学の広報誌などにより行われている。「フィールド医学研究会」と「アジア僻地医療を支援する会」の活動目標は、相手コミュニティへ予め周知された後に活動を行っている。フィールド医学研究会年次報告書、高知新聞への記事掲載及び単行本などでも活動の目標や趣旨が周知・公表されている。「アジア僻地医療を支援する会」が実施する活動及び一部の教室独自の活動は、「外交の窓 in 高知」開催の際に市民講演として公表されている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。改善システムの整備・機能 活動状況の問題点を点検するために、特別な調査・ヒアリングなどは行っていないが、「フィールド医学研究会」と「アジア僻地医療を支援する会」及び個別の教室活動については、各活動の後に反省会を開き問題点の把握に努めている。また、政府間協定や科学研究費補助金、JICA 及び地方自治体などによる支援活動については、それぞれの報告書や教室会議等で必要に応じて問題点を把握し改善を図っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして相応である。

#### 活動の内容及び方法

活動計画・内容 開発途上国への国際交流及び協力活動の計画と内容は、よさこいプロジェクト小委員会や「フィールド医学研究会」と「アジア僻地医療を支援する会」による活動については、担当教室の教員が必要に応じて相手側担当者と綿密な連絡・調整をとりながら、計画・実行されている。前述以外のアジアやその他地域の開発途上国への活動 科学研究費補助金による海外学術調査、JICA 支援活動、地方自治体支援活動は、担当支援組織

及び教室間で連絡の上、綿密な計画策定及び内容について検討の上実施している。「フィールド医学研究会」と「アジア僻地医療を支援する会」による活動には、現地よりの支援要請依頼が次々と寄せられるなど発展性が見られる。その他アジア諸国及び南米大陸におけるフィラリア症、プライマリーヘルスケアなど、地域保健に関する個別の援助活動等も目標との整合性及び発展性がある。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。活動の方法 よさこいプロジェクト小委員会は資金提供教室、参加教室と連携し、佳木斯大学との調整を行っている。活動資金は担当教室の拠出金及び派遣先の負担である。「フィールド医学研究会」は財団助成金を獲得し、「アジア僻地医療を支援する会」に対しては、科学研究費補助金等を獲得し活動に充てている。また、インドネシア友好の会等と連携し、チャリティコンサート・バザーなどを開催し、活動資金を獲得してきた。さらに、地方自治体の国際交流資金への助成申請や募金活動や、企業からの寄付を集めるなどの資金獲得の努力・工夫を行っている。各教室では、科学研究費補助金、在外研究員派遣経費、民間財団等の資金獲得を行っている。各活動とも電子メールやホームページの利用による活動の効率化を図っている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

#### 活動の実績及び効果

活動の実績 よさこいプロジェクトに関する実績は、外国人研究者の受入れは過去 5 年間で 5 名、派遣は 6 名、留学生の受入れは過去 5 年間で 11 名、共同研究は過去 5 年間で 3 件であり、当該大学の目標へ貢献している。「フィールド医学研究会」と「アジア僻地医療を支援する会」による活動件数及び派遣人数は、平成 10 年度 2 件 14 名、11 年度 6 件 40 名、12 年度 7 件 24 名、13 年度 6 件 22 名、14 年度 7 件 16 名であり、一定の水準を維持している。科学研究費補助金、JICA 支援活動、その他地方自治体や学協会による諸活動についても、毎年 2～5 件で推移している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。活動の効果 よさこいプロジェクト「アジア僻地医療を支援する会」、「フィールド医学研究会」による活動については、参加者の感想や、再度参加を希望する者が多いことから、満足度の高さがうかがえる。「アジア僻地医療を支援する会」による現地の劣悪な医療環境の改善及び医療支援活動後に、支援要請が次々寄せられたことや、インドネシアへの援助に対して当該政府からの感謝状、ソロバ村からの感謝状などに見られるように、受入れ側現地地域住民の満足と社会的ニーズに十分対応している。その他科学研究費補助金等による活動も、相手国の社会的ニーズに応えるものである。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

## 評価項目ごとの評価結果

高知医科大学の「国際的な連携及び交流活動」について、当該大学の目的及び目標に照らして行った活動の分類（教職員等の受入れ・派遣，教育・学生交流，国際会議等の開催・参加，国際共同研究の実施・参画，開発途上国等への国際協力）ごとの評価結果を，評価項目単位で整理し，以下のとおり，評価項目ごとの評価を行った。

### 1 実施体制

評価は，実施体制の整備・機能，活動目標の周知・公表，改善システムの整備・機能の各観点に基づいて，目的及び目標の達成に貢献するものとなっているかについて行った。

#### 目的及び目標の達成への貢献の状況

実施体制の整備・機能の観点では，活動の分類「教職員等の受入れ・派遣」に関して，国際交流委員会の下に各種関係委員会を設置し，全学的体制が構築されていること等，活動の分類「教育・学生交流」に関して，地域支援ネットワークとの協力体制による留学生支援等，活動の分類「国際共同研究の実施・参画」に関して，プロジェクト小委員会を中心とした実施体制等，活動の分類「開発途上国等への国際協力」に関して，「フィールド医学研究会」や「アジア僻地医療を支援する会」との連携体制等を「優れている」と判断した。その他の活動の分類に関しては「相応である」と判断した。

活動目標の周知・公表の観点では，活動の分類「開発途上国等への国際協力」に関して，新聞への記事掲載による周知等を「優れている」と判断した。その他の活動の分類に関しては「相応である」と判断した。

改善システムの整備・機能の観点では，各活動の分類において，活動終了後の反省会等により改善を図るシステムとなっていることなどにより，全ての活動の分類に関して「相応である」と判断した。

これらの評価結果から，総合的に判断し，以下の水準とした。

#### 貢献の程度（水準）

目的及び目標の達成に相応に貢献している。

#### 特に優れた点及び改善を要する点等

ここでは，活動の分類ごとの評価結果から特に重要な点を，特に優れた点，特色ある取組，改善を要する点，問題点として記述することとしていたが，該当するものがなかった。

### 2 活動の内容及び方法

評価は，活動計画・内容，活動の方法の各観点に基づいて，目的及び目標の達成に貢献するものとなっているかについて行った。

#### 目的及び目標の達成への貢献の状況

活動計画・内容の観点では，活動の分類「教育・学生交流」に関して，国際交流委員会による明確な計画の策定等，活動の分類「国際会議等の開催・参加」に関して，プロジェクト小委員会での明確な立案・実行等，活動の分類「国際共同研究の実施・参画」に関して，心臓血管疾患などの国際交流協定や政府間協定による国際共同研究の活動内容等，活動の分類「開発途上国等への国際協力」に関して，相手側との綿密な連絡・調整による計画・実行等を「優れている」と判断した。その他の活動の分類に関しては「相応である」と判断した。

活動の方法の観点では，活動の分類「教職員等の受入れ・派遣」に関して，各種資金の積極的な活用等，活動の分類「教育・学生交流」に関して，企業・財団等の外部資金の積極的な獲得等，活動の分類「開発途上国等への国際協力」に関して，多様な資金獲得の努力・工夫等を「優れている」と判断した。その他の活動の分類に関しては「相応である」と判断した。

これらの評価結果から，半数以上が「優れている」と判断され，特に大きな問題点等は見出されなかったため，総合的に判断し，以下の水準とした。

#### 貢献の程度（水準）

目的及び目標の達成におおむね貢献している。

#### 特に優れた点及び改善を要する点等

ここでは、活動の分類ごとの評価結果から特に重要な点を、特に優れた点、特色ある取組、改善を要する点、問題点として記述することとしていたが、該当するものがなかった。

#### 特に優れた点及び改善を要する点等

「アジア僻地医療を支援する会」によるインドネシア・ソロバ村での支援活動は、受入れ側現地地域住民の満足と社会的ニーズに十分に応えており、特に優れている。

---

### 3 活動の実績及び効果

---

評価は、活動の実績、活動の効果の各観点に基づいて、目的及び目標で意図した実績や効果がどの程度挙げられたかについて行った。

#### 目的及び目標で意図した実績や効果の状況

活動の実績の観点では、活動の分類「教職員等の受入れ・派遣」に関して、目標に対する十分な数値実績等、活動の分類「教育・学生交流」に関して、龍馬オーシャンプロジェクトによる活動実績、活動の分類「国際共同研究の実施・参画」に関して、分子・生体制御学領域から社会医学、医療情報学にいたる幅広い分野に渡り発展性があること等、活動の分類「開発途上国等への国際協力」に関して、目標達成に十分に貢献する実績等を「優れている」と判断した。その他の活動の分類に関しては「相応である」と判断した。

活動の効果の観点では、活動の分類「国際会議等の開催・参加」に関して Pearl シンポジウムの大きなインパクト及び高い満足度等、活動の分類「国際共同研究の実施・参画」に関して、相手側の満足度の高さや社会的ニーズに十分応えていること等、活動の分類「開発途上国等への国際協力」に関して、相手側の満足度の高さや社会的ニーズに十分応えていること等を「優れている」と判断した。その他の活動の分類に関しては「相応である」と判断した。

これらの評価結果から、半数以上が「優れている」と判断され、特に大きな問題点等は見出されなかったため、総合的に判断し、以下の水準とした。

#### || 実績や効果の程度（水準）

目的及び目標で意図した活動の実績や効果がおおむね挙げられている。

## 特記事項

大学等から提出された自己評価書から転載

本学では平成 13 年 7 月 1 日、高知医科大学医学部附属病院開院 20 周年記念事業として、国際医療シンポジウム「外交の窓 in 高知」を開催した。テーマは「21 世紀の国際医療協力を考える」であった。主催は高知医科大学医学部附属病院、共催は外務省、後援は(社)霞関会・高知県・高知県医師会・高知新聞社・朝日・毎日・読売・産経各新聞社支社・NHK 高知放送局・RKC 高知放送・テレビ高知・高知さんさんテレビで、対象者は医療関係者、学生、一般であり、参加料は無料で、参加者は 260 名であった。本学の池田久男学長ならびに外務省国内広報課長宮下孝之氏からの開会の挨拶、次いで国際協力事業団理事高島有終氏の基調講演「これからの国際協力を考える」の後、「21 世紀の国際医療協力を考える」をテーマにパネルディスカッションが行われた。パネリストは本学教授瀬口春道、橋口義久、アムダ理事長菅波茂、国立国際医療センター医師明石秀親、コーディネーター本学附属病院長相良祐輔であった。この会は、今後の国際支援のあり方を外務省と担当官、アムダ関係者、国際医療センターの医師らと共に考えたものであり、また医療関係者に限定されることなく、広く県民と共に国際医療協力、貢献のあり方について現状を踏まえて考えようとしたものであった。その意味で、今後の本学の国際医療への取組の方向付けに大きな示唆を与えるものと思われ特記した。

本学は平成 15 年 10 月に高知大学と統合し新「高知大学」となる。新大学では国際連携・交流を担当する部署として留学生センター 総務部国際・研究協力課が新設される予定である。この新組織によってこれまでの高知医科大学では不十分であった国際交流活動の目標の周知・公表あるいは改善システムが大きく改善でき、「国際連携」はこれまで以上に拡大・深化させることが見込まれる。現高知大学は 21 大学と大学間協定を結んでいるが、中でもクイーンズランド大学との協定は昭和 55 年からという長い歴史をもっている。高知医大との協定とあいまって、統合により同校との交流は大幅に拡大していくであろう。また、UBC との協定は現在医学部同士に限られているが、統合後は大学間の協定に発展し、農学、理学、人文、教育各学部を含めた文字通りの総合交流が可能になると予測できる。従来、医学部としては医学・医療分野での「国際連携・交流」が中心であったが、今後は総合大学として他の学部とも連携した総合教育・学術交流が可能であろう。

## 国際医療シンポジウム

## 『外交の窓 in 高知』

テーマ:「21世紀の国際医療協力を考える」

日時:平成13年7月1日(日)  
午後2時～5時

場所:RKCホール(高知市本町3-2-15)

高知医科大学医学部附属病院開院20周年  
記念事業

主催:高知医科大学医学部附属病院 共催:外務省

後援:(社)霞関会・高知県・高知県医師会  
高知新聞社・朝日新聞社高知支局・毎日  
新聞社高知支局・読売新聞社高知支局・  
産経新聞社高知支局  
NHK高知放送局・高知放送・テレビ高知・  
高知さんさんテレビ

## プログラム

開会挨拶 高知医科大学長 池田久男  
外務省国内広報課長 宮下孝之基調講演  
「これからの国際協力を考える」  
国際協力事業団理事 高島有終

## パネルディスカッション

テーマ「21世紀の国際医療協力を考える」  
パネリスト 高知医科大学教授 瀬口春道  
高知医科大学教授 橋口義久  
アムダ理事長 菅波茂  
国立国際医療センター医師 明石秀親  
コーディネーター高知医科大学病院長 相良祐輔

閉会挨拶 高知医科大学病院長 相良祐輔